『語学教育研究論叢』第 37 号

張廷彦『三國選粹』の改編研究

許　辰晨

Research on Modern Adaptation of Zhang Tingyan's *Sanguo Xuancui*

XU Chenchen

提要：

出版於 1918 年的『三國選粹』是張廷彦根據中國明代羅貫中的通俗小說《三國演義》改編而成的官話教科書。本書節選《三國演義》内容，分為八章，將原著中明代白話的文體和詞語改編成清末民初的「最新通用官話」。本論文通過對『三國選粹』和《三國演義》的比較，整理兩書的刪減部分、增加部分以及改編部分，並對刪減、增加和改編的理由進行具體分析，考察當時通用官話的状况和張廷彦對「最新通用官話」的認知。

キーワード：『三國選粹』《三國演義》 通用官話　言語表現の削除・増加と改編

目次

1 序章
1.1『三國選粹』と《三國演義》
1.2 二種類の改編
2 削除の部分について
2.1 詩句の削除
2.2 文の削除
2.3 虚詞の削除
2.3.1 “之”の削除
2.3.2 その他の虚詞
3 増加の部分について

3.1 “的”の増加
3.2 語気詞の増加
3.3 その他
4 改変の部分について
4.1 虚詞の改変
4.1.1 “之”の改変
4.1.2 語気詞の改変
4.1.3 副詞の改変
4.1.4 連詞の改変
4.1.5 介詞の改変
4.2 実詞の改変
4.2.1 代詞の改変
4.2.2 動詞の改変
4.3 単音節語彙の改変
5『三國選粋』から見た通用官話

1　序章

1.1　『三國選粋』と《三國演義》

『三國選粋』は張廷彦氏が大正 7 年（1918）に中国明代初期の小説《三國演義》を手本として編纂された中国語教科書であり、それぞれに「三顧茅廬」、「博望燒屯」、「長坂大戰」、「舌戰羣雄」、「赤壁鏖兵」、「華容放曹」、「荊楚得賢」と「張松獻圖」という 8 章の構成となり、合計約 35,900 字。本書は《三國演義》の内容を抜き出し、明代の白話を通用官話に改編し、当時における中国語を学ぶ日本人学生のため編纂された教科書である。

張廷彦（1864-1929 年）は、字少培、号雲鶴、清末順天府大興県（今北京市）の出身である。明治三十年（1897）に東京高等師範学校教師として来日し、昭和 4 年（1929 年）に東京で亡くなった[1)]。日本で 32 年にわたり、東京帝國大學、東京高等商業學校、早稲田大學、東京外国語学校、陸軍経理学校、鉄道省などで勤め[2)]、20 種以上の中国語教科書を出版し、明治以来の近代日本における中国語教育に大いに貢献した。

《三國演義》は中国の明代に成書し、三国時代（魏、蜀、呉）を歴史背景とする歴史小説であり、四大名著の一つである。《三國演義》は広く伝わり、版本も非常に多い。現存する最も古い版本は嘉靖元年（1522）に発行された嘉靖本『三国志通俗演義』で

1) 楊鉄錚『明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と『官話指南』を中心として』第 2 章第 4 節（2017：63）。
2) 斯文会『斯文』（1929：75-76）。

ある。嘉靖本は全 24 巻 240 則から構成され、24 巻では 10 則が 1 巻となっていた。各則の題名は比較的に短く、七字である。しかし、その後の『水滸伝』などの影響によって、全 120 回に再構成され、各回を「第〇〇回」と変更され、「章回小説」と呼ばれる。後の毛宗崗本は、各回の題名が対句を用い、さらに、各回の最後に“**〇〇如何，且聽下回分解**”という文を挿入している[3)]。

本論文が使用する《三國演義》の版本は台湾の遠流出版社が出版した《中國歴史演義全集 三國演義》で毛宗崗本である可能性が高いとされている。また、『三國選粋』とこの台湾版《三國演義》の比較作業で、二書の相関表現は基本的に一致しているのが分かった。故に、本論文は台湾版を用いて、『三國選粋』と比較を行う。

表紙に「支那最新通用官話」が記載されたことによると、『三國選粋』は日本人学習者に当時における「通用官話」を教える教科書であることが分かる。本書は序文、凡例がなく、本文だけのテキストである。本文は八章に分けられ、それぞれ《三國演義》の第三十七回から第五十回まで、第五十七回から第六十回までのストーリーから改編した。『三國選粋』のストーリーの内容から、張廷彦氏は蜀の劉備グループを中心とし、主に劉備の「仁」、諸葛亮の「智」、関羽の「忠」と張飛の「勇」などを積極的に描写を行った。このように抜き出して編纂する原因は、張廷彦氏が「蜀漢正統論」という思想を持っている可能性が高いと推測する。

1.2　二種類の改編

二書の比較によって、張廷彦氏が『三國選粋』の第一章と第二章に対する改編は最も緻密であり、基本的に逐語に対応したことを分かった。例えば：**徽曰：“此中曹操之 計 矣。吾 素聞徐母最賢，雖爲操所囚，必不肯馳書 召 其子，此書必詐也。元直不去，其母尚存；今若去，母必死矣。”/ 徽說 這是中了曹操的 計策 了，我 向來 知道徐母最賢德，雖然被囚，也決不肯發信，叫 他兒子去，這封信必是假的，若是徐庶不去，徐母還可以活着，這一去徐母必要死的。**という文である。（二重線は改変を表し、波線は削除を表す。）上例から、張廷彦氏の改編する方法が非常に緻密であることが見える。動詞、助詞、代詞、連詞及び語気詞などが全て改編された。

第三章の改編は、第一、二章のような逐語に対応する改編が少なくなり、基本的な文の改編することが多い。例えは：**乃叱宋忠曰：“你知衆人作事，何不早來報我？今雖斬汝，無益於事。可速去。”/ 遂 說如此大事，你等不來稟報，本應殺你，然殺你也無濟於事，快去罷。// 許諸復回坡前，提兵殺入。至林下追尋時，不見一人。/ 許諸卽帶兵殺至坡前，林下並不見一兵。**などの文である。また、以上のような文の改編を除く、第三章に殆ど改編を行わない文が一部ある。例えば：**大中大夫孔融諫曰：“劉備、劉表，皆漢室宗親，不可輕伐，孫權虎踞六郡，且有大江之險，亦 不 易 取，今丞相**

[3)] ウィキペディア　フリー百科事典「三国志演義の成立史」。

興此無義之師，恐失天下之望。”/ 大中大夫孔融諫說，劉備劉表，都漢室宗親，不可輕伐，孫權虎踞六郡，且有大江之險，也 不 容易 取勝，現丞相興此無義之師，恐失天下之望。などの文である。以上の三例によって、張廷彦氏が第三章に対する改編は第一、二章よりあまり緻密ではなく、基本的に「文全体の改編」と「殆ど改編しない」という二種類の改編方法に分けられた。よって、第三章は張氏が改編する過程で過渡章と見なすことができる。

第四章から第八章まで、張廷彦氏は第三章に対する改編方法を受け継ぎ、また「殆ど改編しない」という方法を多く使用する。筆者は以下の文を例として挙げる：孔明曰：“曹操勢大，急難抵敵，不如往投東吳孫權，以為應援，使南北相持，吾等從中取利，有何不可。”玄德曰：“江東人物極多，必有遠謀，豈肯相容耶？”孔明笑曰：“今曹引百萬之衆，虎距江漢，江東安得不使人來探聽虛實？若有人到此，亮借一帆風，直至江東，憑三寸不爛之舌，說南北兩軍互相吞併，若南軍勝，共誅曹操以取荊襄之地；若北軍勝，則我乘勝以取江南可也。”/ 孔明說曹操勢大，急難抵敵，不如往投東吳孫權，以為應援，使南北相持，吾等從中取利，有何不可。玄德說江東人物極多，必有遠謀，豈肯相容。孔明笑着說，今曹擁百萬之衆，虎距江漢，江東安得不使人來探聽虛實，如有人到此，亮借一帆風，直至江東，憑三寸不爛之舌，說南北兩軍彼此吞幷，若南軍勝，共誅曹操，以取荊襄之地，若北軍勝，則我乘勝以取江南可也。という文である。後ろの章では、張氏は原文に対する改編が非常に少なくなっており、動詞の“曰”が“說”に改変されたことを除く、語気詞“也”さえもそのままに残された。

以上の分析によって、張廷彦氏の改編は竜頭蛇尾であることが分かった。具体的な原因については、考察が待たれる。改編研究とし、第三章から第八章まで詳しい改編が足りないから、参考する価値を持っていないと思う。故に、本論文は 2.1 節と 2.2 節が全篇を研究対象とすることを除く、残りの節が第一、二章を主な研究対象とし、張廷彦氏の改編に対して具体的に分析、考察したいと考えている。

2　削除の部分について

張廷彦氏が編纂した『三國選粋』は、必要と思わない部分が削除されたが、ストーリーは原著と一致する。原著にあるいくつかの中国古代白話小説の特徴に当れる部分が削除された。改編された『三國選粋』は物語の内容がより理解されやすい外国人向けの中国語教材になった。

2.1　詩句の削除

『三國選粋』の中で、原著に記載された古詩に対しての削除は最も多い。それらの詩は人物像の描写とプロットの叙述に対して大切な役割を果たした。詩は《三國演義》の大切な部分として各章に現れ、『三国選粋』にある八章と対応する第三十七回から第五十回まで、第五十七回から第六十回まで、合計 52 首に上る。

改編後の文章は読者に分かりやすくするため、張廷彦氏が原文にある古詩を改変しなく、直接に 35 首の古詩を削除した。それらの削除された古詩はストーリーの叙述に影響を与えない。よって、張廷彦氏はそれらの古詩を削除した後、補充説明を行わなく、直接に後ろの原文に繋がる。

削除された古詩を除く、『三國選粹』の中で依然として一部の古詩が残り、合計 17 首。その中での一部の古詩は人物によって朗誦され、文章前後のつながりと緊密である。例えば：**孔明纔醒，口中吟道：“大夢誰先覺？平生我自知；草堂春睡足，窓外日遲遲。”**などの文である。

また、一部の古詩はストーリーの人物によって朗誦されたことではなく、後文とのつながりもないが、張氏が依然としてそれらの古詩を留めた。例えば：**後人有詩贊嘆孔明說：身未升騰思退步，功成應憶去時言；只因先主丁寧後，星落秋風五丈原。// 百姓聽玄德之言，皆甚傷感，有事說：臨難仁心存百姓，登舟揮淚動三軍；至今憑弔襄江口，父老猶然憶使君。**などの詩である。上例から、張氏の改編する過程で残された詩はいずれも劉備のグループを褒めたたえるものが明らかになった。例えば、以上に挙げた詩はそれぞれに諸葛亮と劉備を褒めたたえる。このほか、『三國選粹』で関羽と趙雲を称揚する詩を含んでいる。この現象は張氏の「蜀漢正統論」という思想と合致している。

残された以上の 17 首の古詩を除き、『三國選粹』の中に原文をそのままに留めたのはまた 3 箇所ある。それらの三つの文は原文にある書簡の部分である。例えば：**玄德呵開凍筆，鋪開蔘紙，寫的是：備久慕高誼，兩次晉謁，未遇空回，惆悵何似，竊念漢朝苗裔，備濫叨名爵，伏覩朝廷陵替，綱紀崩摧，羣雄亂國，惡黨欺君，備心胆俱裂。雖有匡濟之誠，實乏經論之策，仰望先生仁慈忠義，慨然展呂望之大才，施子房之鴻略，天下幸甚！社稷幸甚！先此布達，容再齋戒熏沐，特拜尊顔，面傾鄙悃，統希鑒原。**などの文である。

2.2　文の削除

古詩に対する削除のほかに、張廷彦氏はあるストーリーの内容と会話に対して削除も行った。最も削除が多い文は、原文にある劉備グループ以外の内容と人物会話である。それらの叙述と会話は主に『三國選粹』の第三章から第八章までに集中する。改編後の『三國選粹』は劉備グループのストーリーを中心とし、叙述を行うから、他グループに関するストーリーの内容が大切ではなく、削除しても閲読に影響を与えないと思われる。例えば、原文にある曹操が孔融父子を殺すという部分：**時御史大夫郄慮家客聞此言，報知郄慮。慮常被孔融侮慢，心正恨之，乃以此言入告曹操……操大怒，遂命廷尉捕捉孔融……習收孔融父子屍首，皆葬之。**另有蔡夫人假寫遺囑，劉琮繼位降曹的部分：**劉表既死，蔡夫人與萊瑁、張允，商議假寫遺囑，令次子劉琮爲荊州之主……竟不訃告劉琦與玄德……忽報曹操引大軍逕望襄陽而來……於是劉琮決意，便寫降**

書，令宋忠潛地往曹操軍前投獻。という文である。

2.3　虚詞の削除

2.3.1　“之”の削除

『三國選粋』の一、二章と対応する原文の中に“之”は多く用いられ、多種多様な含意を持っており、《古代漢語詞典》にそれぞれ“第三人稱代詞”、“助詞‘的’”、“用於主語和謂語之間，取消句子獨立性”と“在句中只起調節音節的作用，無實意”などの意味が記載される。

（1）“第三人稱代詞”を表す“之”の削除は：視之，乃司馬徽也。/ 一瞧是司馬徽先生。// 玄德謝之，策馬前行。/ 玄德道了謝，騎馬又往前走了幾里。といった文がある。

（2）“助詞‘的’”を表す“之”の削除は：玄德視之，見小橋之西，一人……/ 玄德一看、見小橋西邊、有一人……// 玄德遂招新野之民，得三千人。/ 玄德立刻招募新野人民，得了三千。などの文がある。

（3）“用於主語和謂語之間，取消句子獨立性”を表す“之”の削除は：數之所在，理不得而奪之；命之所在，人不得而強之。/ 天數已定，理不能勝，天命所在，人不能勉強。// 吾得孔明，猶魚之得水。/ 我得孔明，如魚得水。などの文がある。

（4）“在句中只起調節音節的作用”を表す“之”の削除は：徽笑曰：“以吾觀之，不當比此二人，我欲另以二人出之。”/ 徽說據我看，不當比此二人，應另拿二人比他 // 州平曰：“山野之夫，不足與論天下事，適承明問，故妄言之。”/ 州平說，我本是個山野的平民，不足論天下的大事，因爲將軍岡纔下問，所以纔敢妄談。といった文がある。

張廷彦氏が《三國演義》を改編する時、“之”に対する改編が非常に多く、また複雑である。「削除」の方法が使われたのみならず、「改変」と「不変」という方法も用いられた。“之”状況をもっと把握するため、以下のように“之”に関する改編の状況表を作った。

“之”に関する改編の状況表：

	第三人稱代詞	助詞“的”	取消句子獨立性	調節音節
削除	3	8	5	9
改變	5	17	0	0
不變	1	17	1	0

上表によって、“取消句子獨立性”と“調節音節”を表す“之”は、改編する過程で「削除」の方法しか使われなかったということを分かった。原文と同じところはただ1箇所のみがあり、玄德叱曰：“汝豈不聞孟子云：‘欲見賢而不以其道，猶欲其入而閉之門也。’……”/ 玄德很嗔怪翼德說，你難道連孟子說的，欲見賢而不以其道，猶欲入而閉之門也，這兩句話也不知道麼……。という文である。その中での“欲見賢而不

以其道，猶欲入而閉之門也”という文は孟子が言ったことで、原文通りの「直接引用語」と見なすことができる。また、“取消句子獨立性”と“調節音節”を表す“之”が当時における「通用官話」から徹底的に消えたことを分かった。

また、“第三人稱代詞”と“助詞‘的’”を表す“之”に関する改変の部分を、筆者は 4.1.1 節で説明を行う。

2.3.2　その他の虚詞

張廷彦氏は改編した時に、《三國演義》原文の文末に現れる“也、矣、耳”などの虚詞を削除した。その中の虚詞“也”は『三國選粹』の一、二章と対応する原文の中に合計 38 個あり、削除されたのが 37 個である。古代中国語で“也”は文末語気詞であり、判断と肯定を表す。例えば：視之，乃司馬徽也。/ 一瞧是司馬徽先生。// 此書必詐也。/ 這封信必是假的。といった文にある“也”は文末に付き、判断、肯定を表し、具体的な意味を持っていない。

また、疑問句の文末に“也”を加え、疑問する語気を強くすることができる。例えば：兄何惑於斯人之甚也？ / 兄長何以如此戀戀不捨呢。// 諸葛亮何人也？ / 諸葛亮是何等人。などの文にある“也”は疑問句の文末に位置し、疑問の語気を強くし、具体的な意味も持っていない。

それ以外、また 1 箇所の文言虚詞“也”は『三國選粹』で削除されない。玄德叱曰：“汝豈不聞孟子云：‘欲見賢而不以其道，猶欲其入而閉之門也。’……” / 玄德很嗔怪翼德說，你難道連孟子說的，欲見賢而不以其道，猶欲入而閉之門也，這兩句話也不知道麼……。という文である。ここも直接引用文で変更されることができないから、張廷彦氏が原文を残した。

張廷彦氏が改編する際に、基本的に古代中国語での語気詞“也”を削除したという現象によって、当時における「通用官話」で、虚詞“也”を使用しなかったと思われることを分かった。よって、虚詞“也”を削除しても、文章を理解するのに対して異議が生じない。

また、『三國選粹』一、二章に対応する原文に語気詞“矣”は合計 16 個ある。その中に削除された感嘆を表す語気詞“矣”は 10 個ある。例えば：元直不去，其母尚存；今若去，母必死矣。/ 若是徐庶不去，徐母還可以活着，這一去徐母必要死的。// 徐庶曰：“將軍勿輕視劉玄德。今玄德得諸葛亮爲輔，如虎添翼矣。” / 徐庶說將軍不可小看玄德，現又有諸葛亮輔助，如虎生翼。などの文である。そのほか、改変された“矣”はまた 6 個ある。筆者は後文で叙述を行う。

最後、改編する過程で、語気詞“耳”が削除されたのは比較的な少なく、5 箇所だけである。例えば：玄德曰：“方今天下大亂，四方雲擾，欲見孔明，求安邦定國之策耳。” / 玄德說現今天下不平，四方多事，要見孔明，求治國安邦之策。// 玄德曰：“此非聘大賢之禮，但表劉備寸心耳。” / 玄德說此本非聘大賢之禮，不過略表存心。などの

文である。以上の削除された部分を除く、また2箇所の語気詞“耳”を“罷”と“哪”に変えた。『三國選粋』の一、二章で、原文にある7個の“耳”は全て改編された。

“也、矣、耳”といった虚詞は古代中国語でよ使用されたが、張廷彦氏が改編した時に、基本的に削除された。よって、それらの虚詞は古代中国語で顕著な特徴があるが、当時における「通用官話」で既に姿が消え、あまり使われなかったことを分かった。虚詞に対する削除状況を整理してから、当時における「通用官話」の変化趨勢が見える。

3　増加の部分について

3.1　“的”の増加

一、二章と対応する原文に“的”が使われたところが少なく、ただ1箇所ある。**雲長曰：“我們且看他的計應也不應……。”/ 雲長說我們且看他的計策，有效驗沒有……。**という文である。

張廷彦氏が改編する過程で、“的”の増加は四種類に分けられる。一つ目は、文の中に“的”は「結構助詞」とし、後ろに名詞が付き、「偏正結構」が構成される。『三國選粋』の一、二章に14個の例文がある。例えば：**崗前疏林內茅廬中，即諸葛先生高臥之地。/ 崗前樹林子裏的茅廬，就是先生的家。// 孔明當世大賢，豈可召乎？ / 孔明是今世的大賢，如何能派人去叫他呢。**などの文である。

次は、副詞または形容詞の後ろに“的”を加え、そして動詞を加える。その“的”は現代中国語での“地”に相当する。『三國選粋』の一、二章に**遠見無益之人。/ 大遠的去見一個無益的人。// 那少年慌忙答禮曰。/ 那少年趕緊的還禮說。**といった6例ある。

また、“的”は陳述句の文末に使われ、肯定の語気を表す。例えば：**今若去，母必死矣。/ 這一去徐母必要死的。// 其才不可量也。/ 他的才學，實在是不可限量的。**などの4例がある。

最後、動詞性語彙の後ろに使われ、名詞の代わりに“的”の連語を構成する。このような“的”の増加は第一、二章に1箇所だけある。**下首者清奇古怪。/ 下首坐着的是清奇古怪。**という文である。

3.2　語気詞の増加

第一、二章に語気詞が4種類増加され、合計20箇所ある。それぞれ“呢”、“哪”、“啊”、“罷”である。**語氣詞的作用在於表示語氣。主要用在句子末尾，也可以用在句中主語、狀語的後頭**[4]。語気詞を使うのはストーリーのエモーションを高め、話し手の感情をはっきりと伝えられ、改編後の文体をさらに口語化にする。例えば：**玄德**

[4] **黃伯榮、廖序東 下冊**（2011：31）。

曰：“何處閒遊？”/ 玄德說到何處去了呢。// 是殆天所以資將軍，將軍豈有意乎？ / 此天給將軍留着哪，您有意取麼。// 孔明曰：“亮夜觀天象，劉表不久人世。劉璋非立業之王，久後必歸將軍。”/ 孔明說亮夜觀天象、劉表不久於人世、劉璋非立業之主、將來必屬將軍啊。// 孔明曰：“且再作商議。”/ 孔明說那只好從緩再議罷。などの文である。

周一民（1998）に記載された北京語における常用語気詞によって、改編後の『三國選粹』に使用された語気詞“呢”、“哪”、“啊”は全て北京語常用語気詞であるということを分かった。また、楊杏紅（2014）が考察して、“罷”は明治期における北京官話の教科書に大量的に使用された語気詞である。よって、張廷彦氏が考える「最新通用官話」にいくつかの北京語レベルの語彙が含まれていることを分かる。

3.3　その他

以上に挙げられた語気詞以外、張廷彦氏は他の北京語語彙も少なく増加した。例えば：玄德曰：“元直臨行，薦南陽諸葛亮，其人若何？”/ 玄德說他臨走的時候兒，舉薦南陽諸葛，此人何如。// 遙望山畔，數人荷鋤耕於田間，而作歌曰……/ 看見山邊兒有幾個農夫一邊兒鋤地，一邊兒唱歌，說……// 二人對坐于林間石上，關、張侍立於側。/ 二人卽坐在林下石上，關張二人在旁邊兒站立伺候。などの文である。「アル化」は北京語での顕著な特徴である。張廷彦氏は改編する過程で、「アル化」語彙を少し増加した。

このほか、『三國選粹』の第一、二章で副詞“敢情”を 1 箇所増加した。張飛大笑曰：“……好自在！”/ 翼德大笑說……那敢情自在多了。という文である。

4　改変の部分について

4.1　虚詞の改変

4.1.1　“之”の改変

2.3.1 節“之”に関する改編の状況表によって、張廷彦氏は主に第三人称代詞を表す“之”と助詞“的”を表す“之”に対して改変を行うことを分かる。

第三人称代詞を表す“之”は第一、二章に 5 箇所改変された。例えば：州平曰：“吾亦欲訪之，……”/ 州平說我也正要見他，…… // 夏侯惇進曰：“……可早圖之。”/ 夏侯惇說……應早征服他。などの文である。ただ 1 箇所の改変されなかった文は、卻說玄德自得孔明，以師禮待之。/ 再說玄德自得孔明，以師禮待之。という文である。そういう現象は張氏が改編する過程でのミスかもしれない。上述に述べたように、改編する過程で、第三人称を表す“之”に対して改変する文は改変しない文よりずっと多いという現象によって、第三人称の“之”は当時における「通用官話」で既にあまり使用されなかった。その代わりに現代中国語の“他、她、它”を用いる。

助詞的作用是附着在實詞、短語或句子後面表示結構關係或動態等語法意義。可以分

為結構助詞、動態助詞、嘗試助詞、時間助詞、約束助詞、比況助詞和其他助詞[5]。原文にある「結構助詞」を表す“之”を『三國選粋』で“的”に改変したのは合計17箇所ある。例えば：此中曹操之計矣。/ 這是中了曹操的計策了。// 可比興周八百年之姜子牙、旺漢四百年之張子房也。/ 他可比興周朝八百年的姜子牙，旺漢朝四百年的張子房啊。などの文である。以上の改変された部分以外、『三國選粋』の第一、二章に改変されない部分が17箇所ある。例えば：吾等皆山野慵懶之徒。/ 我們都是山野疎懶之人。// 可乘此機會，取彼荊州爲安身之地。/ 可以趁此機會，取荊州爲安身之地。などの文である。

上述に述べたように、改編する過程で、張廷彦氏は原文にある大部の助詞“之”に対して改編を行わなく、削除しなく、改変もしなかった。よって、「結構助詞」の“的”を表す“之”は、当時における「通用官話」に依然としてよく使わ存在し、書面語によく使用された。のみならず、助詞“之”は現代中国語にまだ使用された。

4.1.2　語気詞の改変

張廷彦氏が改編する過程で、語気詞“乎、矣、若何、耶、耳”などに対する改編が特に目立つ。古代漢語字典によると、“乎”は疑問または反問を表し、“嗎”或いは“呢”に相当する。『三國選粋』の第一、二章に“乎”の改変は8箇所ある。例えば：玄德曰：『此莫非卽孔明乎?』/ 玄德說莫非是孔明先生來了麼。// 孔明當世大賢，豈可召乎？ / 孔明是今世的大賢，如何能派人去叫他呢。などの文である。上例の文にある“麼”は現代中国語の“嗎”に相当する。在日本明治時期的北京官話課本中，基本上都在使用“麼”，“嗎”並沒有取得主體的地位[6]。

“矣”は語気詞で、陳述を表し、現代中国語の“了”に相当する。張廷彦氏が改編する過程で、“矣”に対する改編が6箇所ある。例えば：喚回許昌去矣。/ 把他叫到許昌去了。// 此中曹操之計矣。/ 這是中了曹操的計策了。などの文である。

“若何”は語気詞で、“怎樣”を表す。張廷彦氏は『三國選粋』で“若何”を“何如”に変えて、3箇所ある。以下のように例文を挙げた：元直臨行，薦南陽諸葛亮，其人若何？ / 他臨走的時候兒，舉薦南陽諸葛，此人何如。// 孔明曰：“明公自度比曹操若何?” / 孔明說明公自料比曹操何如。などの文である。

最後、語気詞“耳”は“而已”と“罷了”という意味に相当する。“耶”は疑問または反問を表し、“嗎”或いは“呢”に相当する。その二つの虚詞は『三國選粋』の第一、二章に改変されたところがそれぞれ2箇所ある。例えば：將軍欲使孔明斡旋天地，補綴乾坤，恐不易爲，徒費心力耳。/ 將軍打算叫孔明斡旋天地，補綴乾坤，怕是徒勞無功罷。// 玄德驚訝曰：“先生又非臥龍耶?” / 玄德很詫異說，閣下又不是臥龍先

---

[5] 黃伯榮 廖序東，現代漢語 下冊（2011：28）。
[6] 楊杏紅（2014：141）。

生麼。といった文である。

以上に挙げられた語気詞の“乎、矣、若何、耶、耳”などは明朝初期における語気詞である。それらの語気詞は当時において既にあまり使用されなかったから、それぞれに“麼、呢、了、何如、罷”などの語気詞に改変された。以上の語気詞に対する改編によって、当時における「通用官話」での語気詞の使用状況を分かることができる。

4.1.3　副詞の改変

『三國選粋』の第一、二章に改変された副詞は比較的な多く、“遂、便、否、忽、亦”などがある。それらの副詞の中に、時間副詞“遂”の改変が最も多く、6 箇所ある。“遂”は“趕緊”、“即”、“立刻”などに改変された。例えば：遂整衣出迎。/ 敢緊的出去迎接。// 均遂進文房四寶。/ 均即將文具取來。// 玄德遂招新野之民。/ 玄德立刻招募新野人民。などの文である。周一民（1998）で“趕緊”は北京語における常用時間副詞に分類され、「短時」を表し、“立刻、馬上”という意味を持っている。

また、“便”は以上の副詞“遂”が表す意味と近く、改変されたところが 2 箇所ある。それぞれ：玄德便教備馬。/ 玄德立刻吩咐備馬。// 離草廬半里之外，玄德便下馬步行，正遇諸葛均。/ 離茅廬半里之外、玄德即下馬步行、正遇見諸葛均。という文である。

以上の“遂”、“便”以外、改変された原文にある時間副詞はまだ“忽”がある。改編後の『三國選粋』で“忽”は“忽然”に変更され、3 箇所ある。例えば：忽人報……/ 忽然有人稟說……// 忽聞路旁酒店中有人作歌。/ 忽然聽見道旁邊兒酒舖子裏有人唱歌。などの文である。改変された部分を除く、改変されなかったのは 2 箇所あり、それぞれ：忽見一人容貌軒昂。/ 忽見一人相貌非凡。// 忽見童子招手籬外。/ 忽見書童向籬外招手。という二文である。張廷彦氏が副詞“忽”に対する改変は基本的な半分半分であるという現象から、当時に単音節の“忽”を二音節の“忽然”に変える趨勢があるが、二音節の“忽然”はより口語に傾き、当時における「通用官話」に単音節の“忽”もよく使用されたということを分かった。

“否”は古代中国語で副詞で、疑問句の文末に使われ、是非問句を構成する。改編した時に、張廷彦氏は原文にある“否”を疑問詞“麼”に変えた。例えば：玄德曰：“臥龍今日在家否？”/ 玄德說臥龍今天在家麼。// 玄德曰：“曾見令婿否？”/ 玄德說老先生見著令坦了麼。などの 5 箇所である。ただ 1 箇所の改変されなかった文は：未審得入覽否？ / 未知已蒙垂覽否。という文である。

また、副詞“亦”は“也”に改変され、4 箇所ある。例えば：州平曰：“吾亦欲訪之，正不知其何往。”/ 州平說我也正要見他，不知他的去處。// 玄德曰：“此亦隱者之言也。”/ 玄德說這也是隱者應說的話。などの文である。

最後、副詞“非”は第一、二章に 2 箇所あり、全てに“不是”に改変された。例えば：其人曰：“吾非孔明……”/ 那人說我不是臥龍…… // 玄德驚訝曰：“先生又非臥龍耶？”/ 玄德很詫異說，閣下又不是臥龍先生麼。という二文である。

副詞の改変する状況は多い。以上に挙げられた副詞“遂、便、否、忽、亦”などは文言副詞に傾く。“否”と“忽”といった副詞は現在に依然として使用されるが、基本的にただ文章体に使われ、口語に既にあまり使用されない。副詞の改変から、当時における「通用官話」の発展趨勢、及ぶ「通用官話」での副詞の使用状況を分かることができる。

4.1.4　連詞の改変

連詞起連接作用，連接詞、短語、分句和句子等，表示並列，選擇、遞進、轉折、條件、因果等關係[7]。原文で多く使用された単音節連詞の中に、“因、雖、故”などの使用頻度より高い。改編する過程で、張廷彦氏はそれらの単音節連詞を二音節連詞“因爲、雖然、所以”に変えた。本論文は『三國選粹』の第一、二章を研究対象とするから、以上の連詞が改編された例が少ない。

『三國選粹』の第一、二章に“因”を“因為”に変えたところは2箇所あり、それぞれ：因軍務倥偬，有失拜訪。/ 因爲軍務太忙，沒能去拜訪。// 玄德曰：“近因曹操囚其母……”/ 玄德說因爲新近曹操把他的母親下了監了……。という二文である。

次に、2箇所の“雖”は“雖然”に改変され、それぞれ：州平笑曰：“公以定亂爲主，雖是仁心……”/ 崔州平笑着說，將軍志在平定亂世，雖然是仁心…… // 今日先生雖在家。/ 先生雖然在家。という文である。また、改変されてないところはまだ2箇所あり、臥龍雖得其主，不得其時。/ 臥龍雖得其主，可惜尚未得其時。// 玄德拜請孔明曰：“備雖名微德薄……”/ 玄德拜請孔明說、備雖名微德薄……という文である。“雖”を“雖然”に変えることは当時における「通用官話」の趨勢である。しかし、文章体で“雖”は依然として使用されることできると思われる。

最後、原文にある“故”は『三國選粹』で“所以”に改変された。所以又干戈四起 / 故干戈又複四起 // 所以纔敢妄談 / 故妄言之。などの3箇所である。

4.1.5　介詞の改変

周一民（1998）に“北京口語裡表起點的介詞比較豐富。單音節的有“由、打、從、且”。書面語裏常用介詞“自”，北京口語一般不說，但是有“自從”，只表示時間起點。”[8]と述べられた。『三國選粹』の第一、二章で介詞“自”は“從”または“自從”に改変され、2箇所ある。それぞれ：自高祖斬蛇起義，誅無道秦，是由亂而入治也。/ 從漢高祖斬蛇起義滅秦，是由亂入治。// 孔明曰：“自董卓造逆以來，天下豪傑並起……”/ 孔明說自從董卓欺君、天下豪傑並起……。という二文である。

また、原文にある“從”は“打”に改変されたところが1箇所あり、見于禁从後军奔來。/ 見于禁打後面赶來。という文である。“打”は明らかな北京语でよく使われ

---

[7] 黃伯榮 廖序東，現代漢語 下冊（2011：27）。
[8] 周一民，北京口語語法 詞法卷（1998：217-218）。

ている介词である。よって、張廷彦氏が思う当時における「通用官話」に一部の北京語レベルの語彙は残されたということが分かる。

4.2　実詞の改変

4.2.1　代詞の改変

代詞が改編する過程で、“吾”と“汝”という二つの人称代詞の改変は最も顕著である。“吾”を“我”に変えたところは 16 箇所ある。例えば：吾非孔明。/ 我不是臥龍。// 劉備鼠輩耳、吾必擒之。/ 劉備鼠輩之流，我必將把他擒來的。などの文である。また、人称代詞“汝”を“你”に変えたところは、『三國選粋』の第一、二章に 6 箇所ある。例えば：今番汝休去。/ 這回你不必去。// 曹曰：“汝早報捷書，以慰吾心。”/ 曹說你早報佳音以慰我心。などの文である。

以上の常用人称代詞“吾”と“汝”以外、原文に“某、其、君、吾等、我等、汝等”などの語彙がある。改編する過程で、それらの人称代詞は“我、他、您、我們、你們”などに改変された。それらの人称代詞が原文に少なくあるが、それらの代詞に対する改変によって、当時における「通用官話」での人称代詞の使用状況が分かる。例えば：某乃劉備也。/ 我是劉備。// 今觀其用兵。/ 現看他用兵。// 君可止住後軍。/ 您可以把後軍止住。// 吾等皆山野慵懶之徒。/ 我們都是山野疎懶之人。// 我等皆出迎敵。/ 我們都出去打仗。// 惇罵曰：“汝等隨劉備如孤魂隨鬼耳”/ 罵說你們隨着劉備，如孤魂隨鬼。などの文である。

また、代詞“此”は“這、這裏”などに改変された。例えば：此卽埋伏之兵也！ / 這就是埋伏的兵啊。// 聞徐元直在此。/ 我聽說徐元直在這裏。などの文である

代詞に対する改変によって、張廷彦氏が思う当時における「通用官話」で代詞は“我、你、他、您、我們、你們、這、這裏”などの白話詞に変わり、現代共通語における代詞とほとうど同じであることが分かる。

4.2.2　動詞の改変

『三國選粋』で、動詞の改変は多くある。動詞表示動作、行為、心理活動或存現等。有“動作動詞”、“心理活動動詞”、“存在、變化、消失動詞”、“判斷動詞”、“能願動詞”、“趨向動詞”和“形式動詞”這 7 種[9]。

（1）動作動詞

『三國選粋』で人物の会話が比較的な多いから、動詞“曰”の改変する頻度は最も高い。改編する過程で、動詞“曰”は“說”に改変され、合計 173 箇所ある。例えば：玄德曰：“你只說劉備來訪。”/ 玄德說豫州牧劉備來拜。// 童子曰：“現在堂上讀書。”/ 書童說現在屋中讀書。などの文である

次に、『三國選粋』の第一、二章に“聞”は改変されたところが 8 箇所ある。“聽見”

[9] 黃伯榮 廖序東，現代漢語 下冊（2011：10）。

を変えたのは2箇所ある。それぞれ：忽聞路旁酒店中有人作歌。/ 忽然聽見道旁邊兒酒舖子裏有人唱歌。// 張飛聞知，謂雲長曰……。/ 翼德聽見就對雲長說……。という二文である。また、を変えたところは1箇所あり、玄德聞歌。/ 玄德聽此歌。という文である。最後、“聞”が“聽說”に改変されたところは一番多く、5箇所ある。例えば：聞徐元直在此。/ 我聽說徐元直在這裏。// 聞令兄臥龍先生熟諳韜略。/ 聽說令兄深諳韜略。などの文である。

（2）趨向動詞

趨向動詞は移動する趨向を表し、単音節趨向動詞と二音節趨向動詞がある。古代中国語での趨向動詞“至”は現代中国語の“到”に相当し、『三國選粋』の第一、二章に改変されたところが5箇所ある。例えば：至哀、平之世二百年。/ 到哀平時代二百年。// 等彼軍至，放過休敵。/ 敵軍到時，放他們過來，不必接仗。などの文である。

（3）判断動詞

古代中国語での“乃”は肯定を表し、“就是、原來是”という意味を持っている。改編する過程で、“乃”は判断動詞“是”に改変され、判断と肯定を表す。変えたところは6箇所ある。例えば：視之，乃司馬徽也。/ 一瞧是司馬徽先生。// 答曰：“乃臥龍先生所作也。”/ 農夫說是臥龍先生作的。などの文である。

（4）能願動詞

改編する過程で、原文にある能願動詞“欲”を“要”に改変されたところは8箇所ある。例えば：欲往隆中謁諸葛亮。/ 要到隆中去拜訪。// “吾亦欲訪之。/ 我也正要見他。などの文である。周一民（1998）によると、“要”は北京語口語におけるよく使用されている助動詞で、能願動詞も呼ばれ、「願い、可能、必要」という意味を表す動詞である。

以上の例文を整理してから、明朝初期におけるよく使用された動詞“曰、聞、至、乃、欲”などは既にあまり使われないということが分かる。当時で“說、聽、聽見、聽說、到、是、要”などの動詞はに取って代わり、当時における「通用官話」となった。

4.3　単音節語彙の改変

原文にある一部の語彙は使用回数が少ないが、顕著な特徴があり、即ち単音節趨語彙から二音節語彙に改変された。変えたところは60箇所ある。例えば：欲往隆中謁諸葛亮。/ 要到隆中去拜訪。// 遂整衣出 迎。/ 敢緊的出去 迎接。// 時雲長在側曰。/ 那時關雲長在旁邊說。などの文である。

上例から、明朝初期によく使われた単音節語彙は、改編する過程で、基本的に二音節語彙に改変されたということが分かる。当時で二音節語彙が多く使用される趨勢を示す。また、二音節語彙は既に当時における「通用官話」の特徴となったということも分かる。

5 『三國選粹』から見た通用官話

外国人学習者向けの教科書とし、『三國選粹』の内容は人目を引き付け、高い価値がある。張廷彦氏が抜き出した八章のストーリーは生き生きし、込み入っている。内容上、読む価値がある教科書と言える。また、張廷彦氏が改編する過程で、原文にのっとり、ストーリーの輪郭は原文とほとんど同じである。しかし、語彙の使用上、原文に対して大幅に改編を行った。

第一、二章を主な研究対象とし、改編後の『三國選粹』で一部の文言語彙は依然として残された。結構助詞“之”と副詞“忽”は、改編後の『三國選粹』でまた使用される。よって、“之”と“忽”といった語彙は当時における「通用官話」でまたよく使用されるということが分かる。のみならず、現代中国語でも“之”と“忽”はまたよく使われ、書面語に傾く。しかし、人称代詞“之”と疑問“麼”を表す“否”は、改編後の『三國選粹』で改変されないところがただ 1 箇所ある。そういう現象は張廷彦氏が改編する過程でのミスかもしれない。

周一民（1998）によると、改編後の『三國選粹』で、張廷彦氏は一部の北京語口語の特徴を持っている語気詞を増加した。“呢”、“哪”、“啊”、“罷”などの語彙がある。また、北京語の代表である「アル化」語彙も『三國選粹』にある。張廷彦氏が思う当時における「通用官話」に北京語レベルの語彙があるということが分かる。よって、張廷彦氏が編纂した『三國選粹』は北方通用官話の教科書と見なすことができ、当時における北方通用官話の実態を反映された。

また、『三國選粹』での削除された部分と増加された部分と比べ、改変された部分の「通用官話」の特徴はより明らかである。『三國選粹』は「最新通用官話」教科書とし、張廷彦氏は原文にある明朝初期でよく使用され、非常に難解な語彙を平易で分かりやすく、当時でよく使用される「通用官話」に変えた。語気詞の面で、“乎、矣、耶、耳”などは“麼、呢、了、罷”などに改変された。副詞の面で、“遂、便、否”などは“趕緊、立刻、麼”などに改変された。連詞の面で、“因、雖、故”などは“因爲、雖然、所以”などに改変された。また、代詞の面で、“吾、汝、君”などは“我、你、您”などに改変された。最後、ある単音節語彙は二音節語彙に改変され、例えば“謁”は“拜訪”に改変され、“出”は“出去”に改変されるということなどである。それらの語彙に対する改編によって、当時における「通用官話」の実態は『三國選粹』という本で客観的に反映された。

改編後の『三國選粹』は民国初期北方通用官話が記載された教科書と見なすことができ、当時における「通用官話」の文法と語彙が多く収録された。本書は百年前の「通用官話」を研究することに対して、重要な言語史料である。

参考文献

張廷彦 1918『三國選粋』文求堂書店

雑誌斯文会 1929『斯文』「張廷彦の長逝」

羅貫中 1979《**三國演義**》**遠流出版社**

周一民 1998《**北京口語語法**》（**詞法巻**）**語文出版社**

黃伯榮、廖序東 2011《**現代漢語**》（**增訂五版**）**高等教育出版社**

楊杏紅 2014《**日本明治時期北京官話課本語法研究**》**廈門大學出版社**

商務印書館辭書研究中心 2014《**古代漢語詞典**》（**第二版**）**商務印書館**

楊鐵錚 2017「明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と『官話指南』を中心として」東京学芸大学博士論文